第 3 章

# 多摩市の歴史 (多摩ニュータウン開発前まで)

多摩ニュータウンの開発がおこなわれる以前の多摩市域は農村地帯でした。市域には旧石器時代から人が住みはじめた痕跡がみられます。その後、縄文時代以降、人々は丘陵地の谷戸の部分に田畑を作り、農業を営むなどして暮らしてきました。開発前の暮らしで培われた様々な文化や歴史は、多摩市の礎となるものです。

ここでは、多摩ニュータウン開発前の歴史や暮らしの様子をご紹介します。



**多摩町役場前にて** 昭和30年代末~40年代初頭



平久保(びりくぼ)のシイ 1977(昭和52)年頃



現在の平久保のシイ 2016(平成28)年9月



工事中のようす(中央に平久保のシイ) 1978(昭和53)年3月

# 地域の変化を見つめた木々

多摩ニュータウン開発や多摩市市制施行により、多摩市は大きく変わったが、その変貌を見つめ続けてきた樹木がある。平久保のシイは、推定樹齢500年~600年で、1961(昭和36)年より東京都の天然記念物に指定されたスダジイである(左上写真)。開発の際にもそのまま残して開発され(左下写真)、現在も変わらぬ位置で街を見守る(右上写真)。

連光寺春日神社境内にあるケヤキの大木は、推定樹齢300年とも言われ、多摩市指定天然記念物でもある(右下写真)。 これらの木々は、現在も地域を静かに見つめ続けている。



**春日神社のケヤキ** 2014(平成26)年5月

# (1) 旧石器時代から古代までの多摩









# ■丘陵の先住者たち

多摩ニュータウンが建設されるまで、多摩丘陵の一帯は閑静な農村地帯で、まさか遺跡が1,000か 所近くも眠っているとは予想もされていませんでした。

丘陵にヒトが住み始めたのは約3~4万年前の旧石器時代からで、寒冷だった氷河時代が終わる1万6千年前頃になると、縄文時代草創期の土器が造られるようになります。縄文時代早期には丘陵の地形を利用した獣捕獲の陥穴群や半地下構造の竈のような炉穴が多数構築されました。中期には大規模な集落が各地に営まれており、もっとも活況を呈しました。それが中期末から後期初になると、寒冷気候で



### 多摩ニュータウン地域遺跡分布図

遺跡の分布密度は西高東低である。東側がまばらなのは、昭和40年代に開発側に急き立てられて任意の遺跡調査会が諏訪、貝取、 愛宕地区などを調査した範囲である。その後、旧石器遺跡も検出されて調査の進捗が遅れるようになり、1980(昭和55)年に東京 都埋蔵文化財センターが設立されて組織を挙げた発掘調査がおこなわれ、2006(平成18)年にようやく終了した。



#### 旧石器人の生活跡

吉祥院の東側斜面のNo.769遺跡から約2万年前の遺跡が発掘された。旧石器人が解体した獣の肉を石焼き料理にした集石遺構や、石器や石器製作の石片が周囲に散布する。



#### 陥し穴(おとしあな)

長さ1.5m、幅1.0m、深さ1.5mほどの楕円形の陥し穴が丘陵のいたる所に掘られている。底面に逆茂木(さかもぎ)を埋め込んだ小穴があり、杭は落ちたイノシシなどの逸出を妨げる工夫らしい。

居住環境が丘陵から沖積地に移ったらしく、一転して遺跡が希薄になります。晩期から弥生時代になっ ても丘陵上には人影が少ないが、弥生時代も半ばになると、相模湾や港北方面から境川(町田市、神奈 川県)沿いに弥生文化が上ってきて、相模野を見下ろす丘陵西斜面から開発されるようになります。

これら発掘調査の成果品はいま、多摩センター駅近くにある東京都埋蔵文化財センターの展示室で見 ることができます。(安孫子昭二)



### 炉穴

ヒトが穴の中で焚火をしたため一端が赤く焼土化し ている。燻製をしたらしい。露天のままでは雨水が浸 入するので簡単に小屋掛けされていたはずである。



### 縄文中期集落

八王子市堀之内 No.72遺跡

5300年前から800年続いたニュータウン地域で最大の規模の集落。竪 穴住居が何度も建て替えられて重複が著しい。



多摩市和田・多摩第二小学校出土の縄文中期土器組成

大栗川下流域の中規模な環状集落・和田百草遺跡14号住居跡から一括出土した。大形深鉢は約50㎝、中形深鉢は30㎝ほどで、小 形浅鉢が1個体だけ混じっている。1家族の土器組成にしては多過ぎるので、共同体の什器であろうか。なお、上流3kmにある最 大規模の環状集落の多摩ニュータウンNo.72遺跡との関わりが想定される。

# ■稲荷塚古墳と塚原古墳群

### (1)塚原古墳群の形成

和田古墳群は、大栗川下流域の段丘面に6~7世紀にかけて営まれた地方豪族たちの墳墓です。そのうち、右岸北部に分布する塚原古墳群では、墳丘径10~19mを有する12基の円墳等が発見されています。河原石積みの横穴式石室を主体部とする4・5・6号墳からは、鉄刀や鉄鏃など多くの武器類が出土しており、造墓集団の性格の一端がうかがえます。また、対岸には中和田横穴墓群や日野市万蔵院台古墳群なども所在し、古代多摩における中核地域の一つでした。



### 塚原古墳群の近景

6~7世紀

5号墳・10号墳(左から)で、ともに円墳である。古墳は近接して構築されており、墳丘の外周には周溝をめぐらす。





塚原5号墳から出土した鉄刀

6世紀後半

横穴式石室の内部からは、鉄刀や鉄鏃などの鉄製武器類が礫床に置かれた状態で発見された。 鉄刀には、長さ33cm~101cmの4口がある。

### **塚原5号墳の石室** 6世紀後半

横穴式石室の規模は全長4.7m、幅0.7mで、短冊形を呈している。 石室の石材は、多摩川や大栗川の河原石を用いて構築されていた。

## (2) 稲荷塚古墳の性格

稲荷塚古墳は和田古墳群の南端部高所に築造された、古墳時代終末期の首長墓です。内部には、全長7m以上の胴張り形複室構造の横穴式石室を有します。1990 (平成2) 年~2018 (平成30) 年の周溝など外部施設の確認調査により、円墳ではなく、八角形墳の可能性が浮上しました。全国でも屈指の存在と言えます。また、古墳の特徴から、被葬者を『日本書記』の534 (安閑元) 年に記載された多氷屯倉の経営に関わった人物とみる説もあります。1958 (昭和33) 年に東京都の史跡に指定されています。

(松崎元樹)



稲荷塚古墳の石室 7世紀前半 玄室(後室)の奥壁中央には大形の切石が据えられ、両側の壁は円みを帯びた胴張り形態を示す。床面には拳(こぶし)大の円礫が敷かれ

ていた。石室床からは、ベンガラ(赤色顔料)が検出された。

稲荷塚古墳の墳丘復元図 古墳の対角径を復元すると約38mで、外側の周溝には 複数の稜角が確認され、八角形状を呈する。

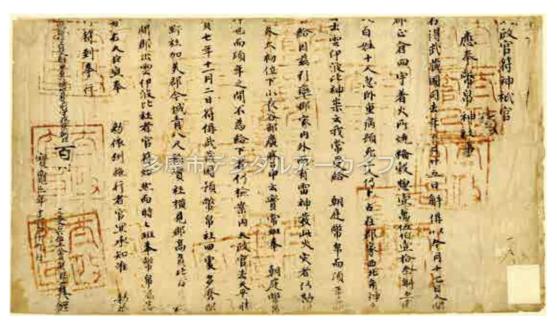


中和田横穴墓群 7世紀 大栗川左岸の台地斜面に14基の墓がまとまって見つかった。横穴墓は斜面をくり抜いて構築されており、塚原古墳群に次ぐ、有力な家族集団により形成された。

# ▮小野神社と小野牧

小野神社が創建された年代ははっきりしていませんが、755 (天平勝宝7)年には朝廷から幣帛を受ける神社であったことが分かっており、境内からは奈良~平安時代の古瓦が見つかっています。平安時代には、武蔵国の一宮と位置づけられ、後に一ノ宮明神社と呼ばれるようになりました。

小野郷には、平安時代になると小野牧という馬牧が置かれました。931 (承平元) 年には毎年40頭の馬を朝廷に貢納することになっており、京に送られた馬は「駒牽」という儀式で天皇の前に牽き出さ



**太政官符(複製)** 772(宝亀3)年 この史料から755(天平勝宝7)年には小野神社が存在していたことが分かる。



『元暦校本万葉集 古河本』巻20(部分) 平安時代・11世紀成立 奈良時代、武蔵国の防人は武蔵国府から 多磨の横山を越えて筑紫へと旅だった。



『日本三代実録』 901(延喜元)年成立 884(元慶8)年7月15日条。小野神の神階が従五位上から正五位上にあげられた。

れ、左右馬寮や官人に配分されました。小野牧のあった場所は正確には分かっていませんが、小野神社の東に位置する落川・一の宮遺跡では、馬の骨や歯、馬具、焼印などが出土しており、小野牧の推定地の一つとされています。11世紀後半になると、こうした馬の生産と関わりながら小野を姓とする武士団横山党が成長していきました。(鎌倉佐保)









小野神社境内採取瓦(4点) 奈良~平安時代 1955(昭和30)年頃境内の松の根元から出土した。



落川・一の宮遺跡出土馬具 奈良・平安時代 8世紀後半頃の遺構から轡(くつわ)や馬の歯、11世紀 前半と考えられる遺構から馬具・鏃などが出土した。



『**政事要略**』 11世紀初頭成立 931(承平元)年11月7日条。もとは陽成院の牧であった 小野牧が勅旨牧とされた。



小野系図(『続群書類従』所収) 横山党小野氏は小野篁に系譜を引き、義隆のとき横山に住んだこと に始まると伝える。

## 《トピックス》

## 律令時代の古代道

1990 (平成2) 年、多摩市連光寺2-33-1他の打越山遺跡で、開発に伴い道路の形状を残す遺構の発掘調査が実施されました。その結果、延長約100mにも及ぶ、3時期の道路面が確認されました。本発掘調査は、多摩丘陵部では初めてとなる道路遺構の本格的調査、発見となり注目されました。築造年代は、最下層の道路面は、古代律令時代7世紀後半から8世紀頃、その上部の道路面は鎌倉〜室町時代頃、最上層が近世と考えられます。最下層の道路は、その走行方向、規模などから推測して、古代の官道で、国分寺市などで発見されている、国史跡東山道武蔵路の古代道と結ばれる可能性があると考えられています。そのため、武蔵国府と東海道を結ぶ、推定古代東海道連絡路とも言えるとの見解もあります。さらに、付近に「早道場」の小字も残されていることから、鎌倉時代には、本道が鎌倉街道上道の支線、いざ鎌倉への「早ノ道」として踏襲されたと考えられます。(山崎和巳)





打越山遺跡の位置

東山道武蔵路と武蔵国周辺の推定古代路



完掘調査状況・最下層の古代道(南から) 幅約9m~12mの掘割状の弧状断面形。



完掘調査状況空撮(北から) 延長約100mにも及ぶ、古代の直線道。

# (2) 鎌倉時代から江戸時代までの多摩



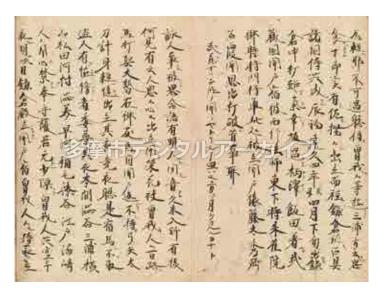




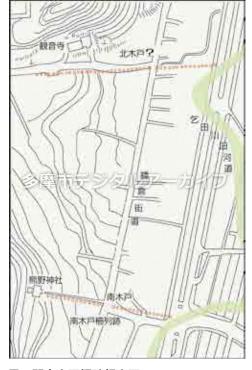
# 】関戸と鎌倉街道

多摩川を挟んで武蔵国府の対岸にあたる関戸は、鎌倉街道上ノ道が通り、宿が置かれ市が立った交通の要衝でした。『曽我物語』には、源頼朝が鎌倉から上野・下野の狩猟場に赴く途中、関戸宿を通った時、平将門がここに関を立て藤原秀郷が「霞の関」と名付けたことを偲んだと出てきます。関戸は、「霞の関」として多くの旅人の歌に詠まれました。

関戸はたびたび合戦の場ともなりました。なかでも1333 (元弘3) 年5月16日の新田義貞軍と鎌倉幕府軍との、分倍河原合戦に続く関戸での戦いは、幕府方を潰滅させるような激しい戦闘となりました。



『**曾我物語(真名本)』第5巻(部分)** 南北朝期成立 1193(建久4)年部分。源頼朝は鎌倉から上野国に向かうとき関戸宿に 宿泊し、霞の関の故事を偲んだ。



**霞ノ関南木戸柵跡想定図** 1955~64年(昭和30年代)頃の調査で柱穴が見つかったというが、年代など詳細は不明である。



松田盛秀判物 1555(天文24)年1月 戦国時代、関戸には商人や参詣者を泊める宿があったことが分かる。

『太平記』には横溝八郎・安保入道などが奮戦して討ち死にした様子が描かれています。

また関戸は武蔵国府の境界地域にあたり、都市の周縁の葬送地でもありました。鎌倉末期から室町時 代にかけて、川を見下ろす街道沿いに、供養のため板碑という塔婆がたくさん造立されました。関戸の 観音寺の一角に今もその板碑の一部を見ることができます。(鎌倉佐保)



鎌倉街道上道 関戸古戦場跡、安保入道の墓、無名戦士の墓などの伝承がある。



八郎塚(横溝八郎の墓) 2006(平成18)年11月 鎌倉幕府方として関戸合戦で奮戦し、討ち死にした横溝八郎の 墓と伝えられる。関戸5丁目。



**『太平記』巻10** 14世紀成立 1333(元弘3)年5月16日、関戸において新田義貞軍と鎌倉幕府 軍の激しい戦闘がおこなわれた。



画像板碑 1322(元亨2)年8月造立 1936(昭和11)年に 関戸の崖から発見 された板碑の一つ。 阿弥陀三尊の画像 が刻まれている。

# ▮鎌倉時代末の制作物

多摩市には遺跡以外にも鎌倉街道の要衝であった証が残されています。武蔵国一宮であったとも伝えずいしん いそうる式内社、小野神社の入り口に当たる随身門(現在の扁額は随神門)にかつて安置されていた随身倚像は、小野神社の歴史を物語る貴重な像です。1\$は墨書銘から1319(元応元)年奉納、因幡法橋 応円作、その後1628(寛永5)年大弐宗慶法印が修理したと分かります。もう1\$はその修理のおりに造ら



小野神社随神門 1964(昭和39)年建立 1926(大正15)年火災にあい、本殿、拝殿再 興の後建立された随神門。現在は新造の随 神像を安置。







**随身像2躯** (左)1628(寛永5)年、(右)1319(元応元)年造立 鎌倉時代に制作され、奉納された随身像(右)と江戸時代初期に 補われた随身像(左)。

### 1975(昭和50)年の修理前の古随身像

寄木造り、挿首、玉眼入り、胡粉地に彩色。 総高74.5cm。 胎内の墨書から制作の事情が分かる。 持物は失われているが、背面に靱を背負う。 れたと思われます。随身とは神社の守護神です。一般に老壮一対の武人姿で、巾子冠、袍、袴を着け、 弓矢を持って座っています。小野神社の随身倚像は、この典型的な随身像の古例であり、全国的にも室 町時代以前の像は珍しいものです。

鎌倉時代から室町時代前期に、板碑が死者の追善供養、自身の逆修供養を目的に数多くつくられました。板碑は上部を三角形の天蓋形にした板状の石材に種字や画像を彫ったものです。武士ばかりではなく室町時代には庶民も板碑をつくりました。多摩市内にも400基ほどの板碑があります。(金丸和子)



### 多摩市の板碑の分布

板碑の分布には偏りがあり、旧鎌倉街道 沿いや川沿いの斜面に多く分布してい ると分かる。

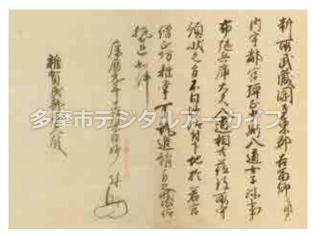


### 念仏供養板碑

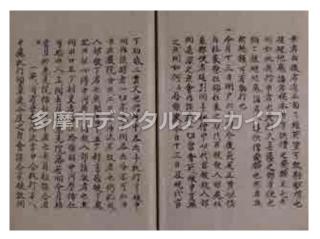
1470(文明2)年11月中旬造立 阿弥陀三尊像に三具足、銘文が記された、念 仏講のための市内最大の板碑(中央)をはじ め25基の板碑が安置されている。貝取山中 から出土。

# 戦国時代の多摩

室町時代になると関戸を中心とする吉富郷(関戸郷)は、鎌倉府の直轄地となり、鶴岡八幡宮に寄進されました。1454(享徳3)年に享徳の乱が起こって戦乱の時代となると、吉富郷は周辺の武士に押領されましたが、鶴岡八幡宮は関東管領上杉房顕を頼って吉富郷の支配を回復し、その後も堀越公方足利政知に訴えるなどしてなんとか支配を続けました。



鎌倉公方足利氏満御教書写 1379(康暦元)年 吉富郷が関戸とも称されており、若宮(鶴岡八幡宮)の所領と なっていたことが分かる。



当社記録(香蔵院珍祐記録) 15世紀後半成立 1461(寛正2)年部分。鶴岡八幡宮の記録。関戸六ヶ村の支配 について記されている。



関戸要害/『江戸名所図会』 1834~36(天保5~7)年刊 1494(明応3)年、関東管領家の山内上杉氏と扇谷上杉氏とが闘争し、扇谷上杉定正の拠る関戸要害が陥落した。

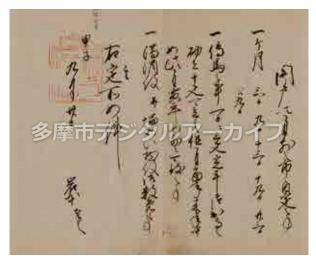
16世紀初め、小田原北条氏が武蔵国に勢力を伸長し、多摩川中流域を勢力下におさめた後も、鶴岡八幡宮は関戸郷内に20貫文を確保していましたが、関戸郷は北条氏の直轄領とされ代官松田憲秀や、給人深谷氏・斉木(佐伯)氏・小林氏などに宛て行われました。現地では、松田氏から有力住人有山源右衛門が関戸宿の管理や関戸郷の年貢納入などを任されました。北条氏が1590(天正18)年に豊臣秀吉に滅ぼされた後も、有山氏は関戸村の有力者として存続しました。(鎌倉佐保)



**聖観音立像** 1544(天文13)年 像の内部には「佐伯豊後」「小林五郎兵 衛」など5名の名前が記されている。



松田憲秀印判状 1585(天正13)年3月 関戸郷内に新宿を立てるため、有山源右衛門に対して開発田を7年間非課税とする ことが認められた。



**北条氏印判状写** 1564(永禄7)年9月 関戸郷には月に六度の市を開催すること(六斎市)などが定められた。



松田憲秀判物写 1588(天正16)年9月 有山源右衛門に関戸の関銭徴収が申しつけられた。

# ▶江戸時代の景観とくらし

現在の多摩市の地名である関戸・一ノ宮・和田・落合・貝取・乞田・寺方・連光寺は、いずれも江戸時代に成立した村名です。江戸時代初期におこなわれた「検地」という政策によってこれらの村の範囲と、村に所属する村人が決定されたのです。

それ以前は「郷」という江戸時代の村より広い地域が存在していました。多摩市域には「関戸郷」と「連光寺郷」がありましたが、このうち「関戸郷」から関戸村・和田村・寺方村・貝取村・百草村(現日野市)・落川村(同)が分立し、「連光寺郷」はそのまま連光寺村となりました。



**中和田村絵図** 1836(天保7)年







寺方村絵図

多摩市域の村は江戸からおよそ30kmと、その行程はおよそ半日の距離であったため、江戸との行き来は頻繁でした。このことから村で生産された炭は江戸で消費され、多摩川で獲られた鮎は江戸城に上納されていました。多摩市をはじめ多摩地域の村々は、江戸あるいは江戸城をささえる場として重要な役割を担っていたのです。また、市域の村は多摩丘陵に位置しており、田地の多くは谷と谷の間に小規模に開発された「谷戸田」が主流で、田地に引く水も天水(雨水をためたもの)や湧水に頼っていました。(桜井昭男)



寺方村・貝取村ほか 秣場論所裁許絵図 (部分)

1707(宝永4)年 谷戸(薄茶色部分)が 入り込んでいる様子 が分かる。



親飼 1930(昭和5)年頃か 江戸時代からおこなわれていた鵜飼は、明治以降は観光の対象となり、 川辺では川魚料理屋が客を集めた。

谷戸田 1965~74年(昭和40年代) 多摩の丘陵地における農村 の原風景。



**炭焼き窯** 1970(昭和45)年 多摩地域は炭の産地として江 戸に多くの炭を供給していた。



# ▮相沢五流・伴主の活動

■五流の絵 18世紀の半ばを過ぎると、市域の村々では、俳諧や和歌、国学、剣術など様々な文化活動が盛んになりました。こうした地域の文化を担った人物に相沢五流(1746 ~ 1822)がいます。五流は通称を源左衛門と称し、関戸村の幕府領の名主をつとめていました。名主の職務や家業の薪炭販売の傍ら、府中の六所宮(現大國魂神社)の社家であった関良雪や伊予国大洲藩主加藤泰恒の六男加藤文麗らに絵を学び、50才の時、家督を息子の伴主に譲り、余生を絵師として過ごしました。五流の作品は多摩地域に多く残されており、吉祥院の「霊昭女図」もその一つです。

■**允中流** 伴主は通称を玄介(源助)と称し、父の五流を越える多芸多趣味の人で、特に蹴鞠・生花・ <sup>えんちゅうろう</sup> 和歌に秀でていました。伴主が創始した允中流挿花は袁中郎流(宏道流)をアレンジしたもので、門人



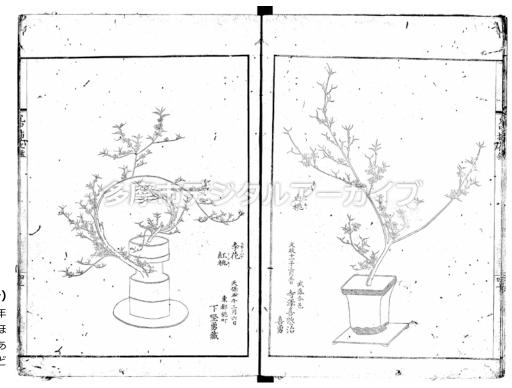
相沢五流「霊昭女図」 1805(文化5)年 五流の作品は吉祥院をはじめ稲城市の常楽寺な ど多摩地域の寺社に多く残されている。



**相沢伴主像図** 1847(弘化5)年頃か 自画像には毬(まり)と花鋏(はなばさみ)が描かれ、 彼が蹴鞠と生け花を愛好していたことを示している。

は南多摩地域を中心に現在の埼玉県所沢市や神奈川県厚木市にまで広がっていました。門弟 112名の 乗売カカガラ 挿花は 1841 (天保 12) 年に『允中挿花鑑』として刊行されています。

■関戸旧記と『調布玉川惣畫圖』 五流と伴主の文化活動の一つに関戸地域の歴史調査があります。その成果は天保年間に『関戸旧記』としてまとめられました。『関戸旧記』の特色は二つありますが、一つは「中世の古戦場」という関戸郷の歴史を発見し、関連史蹟を創り出したことです。伴主は文献や出土品の調査などを通じて、1333 (元弘3) 年5月16日の関戸合戦で討死にした鎌倉幕府方の武将安保 道道場の墓の特定を試みました。もう一つは、古歌に詠まれる「風光明媚な名所」というイメージを生み出したことにあります。伴主は、小野小町の和歌に詠まれる武蔵野の歌枕である「向岡」を、関戸村から始まる丘陵としています。こうした『関戸旧記』の世界観は『調布玉川惣畫圖』として結実しました。刊行にあたっては、允中流の門人たちの協力があり、相沢家の歴史意識が地域の人々に共有化されていたことがうかがえます。(岩橋清美)



『**允中挿花鑑』(部分)** 1837(天保8)年 允中流挿花の門人はほ とんどが村役人層であ り、酒造業や質屋など を経営する者もいた。



『調布玉川惣畫圖』(部分) 1845(弘化2)年 伴主は関戸村の部分に横溝八郎の墓、向岡、天守台などの史蹟や名所を描いている。

# ■ 多摩の古民家 ~ 伝統民家の保存と活用~

昭和40年代中頃以降になると、多摩ニュータウン開発などの開発事業も本格化し、市内の農村社会は生活が急激に近代化しました。それまで地域の文化遺産として受け継げられてきた住居形式も大きく変わり、今までの伝統的な住居は取り壊されて新住宅として生まれ変わっていきました。市内には、江戸時代以降に建築された戦前の茅葺屋根の伝統民家は、1975 (昭和50)年度には、70棟程が残っていました。しかし、現在、残っている民家は、鶴牧の川井家住宅主屋のほか数棟となってしまいました。そのため、茅葺屋根の伝統民家を後世に伝え残そうと、3棟の古民家が復元移築、保存、活用され、さらに、2020 (令和2)年度には、多摩市では初めての国登録有形文化財に川井家住宅主屋と旧川井家住宅土蔵が登録されました。(山﨑和巳)



旧有山家住宅【市指定有形文化財】

江戸時代・18世紀前半の建物。市内でも古い時期の民家であり、できる限り原形に忠実に、1988(昭和63)年に復元した。



### 旧加藤家住宅

江戸時代・18世紀後半の建物。当住宅は古民家の特色を生かした、カマドを利用した古民家体験、会合などのできる場所として貸し出している。有山家住宅と同時期の1988(昭和63)年復元。



### 旧富澤家住宅

江戸時代・18世紀中頃の建物。連光寺の世襲名主、富澤家の主屋。幕末には新選組の近藤勇、土方歳三などが出稽古に訪れ、1881(明治14)年には、明治天皇の連光寺への行幸の際、行在所(あんざいしょ)となり、以来皇族なども数多く訪れている。多摩市で唯一式台付き玄関のある由緒ある古民家である。奥の間など一部を茶会や会合などに活用できるように貸し出している。1993(平成5)年復元。



川井家住宅主屋【国登録有形文化財】

建築は明治初頭と推定される。屋根裏に蚕 室がある、多摩市を代表する養蚕民家。



川井家住宅主屋、土蔵とシダレザクラ(市指定天然記念物)の景観

川井家住宅主屋と土蔵が、園内のシダレザクラと一体となって元の場所にたたずみ、市内では希少な多摩の原風景を残した場所。